

いにしへの映画つれづれ⑤ 「拳銃の報酬」ハリー・ベラフォンテ追悼 千葉豹一郎

さる4月25日、アメリカの歌手、俳優、社会運動家でもあったハリー・ベラフォンテが亡くなった。享年96歳。ベラフォンテを一躍有名にしたのは、「バナナ・ポート」の世界的ヒットだった。

日本でも大ヒットして江利チエミや浜村美智子がカバーし、新人の浜村盤がベテランの江利盤を大きくリードする逆転現象も起きて、紅白にも出場した。

浜村は一気に有名人となり、芸能方面には疎いうちの祖父まで知っていた。後年、浜村が「忍者部隊月光」に女ボス役でゲスト出演した折、一緒に観ていた祖父が「バナナ・ポートだな」とつぶやいたので驚いたことがあった。

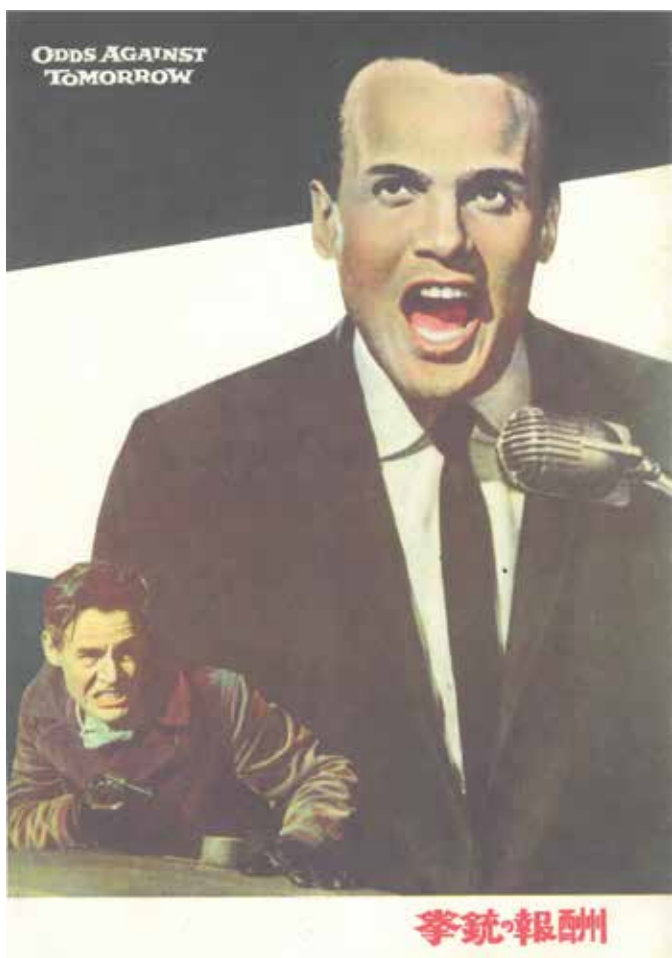
バナナを船から降ろすときの労働歌「バナナ・ポート」は南国らしく底抜けに明るく、熱気がみなぎっていた当時の世相によくマッチして、それほど人々の記憶に残る曲だったのだろう。この頃の日本では、バナナに高い関税がかかっていたため高級品で（パイナップルとレモンも同様）、憧れのような感情もヒットの背景にあったのかもしれない。

Day-o Day-ay-ay-o の歌詞は、痛えーよ、痛てーえーえよ、と聞こえ、子供たちがよく笑いながら唄っていた。ベラフォンテが公演のため来日した際は大歓迎を受け、公演を聴いた三島由紀夫も手ばなしで絶賛した。本数は少ないながら映画でも活躍

し、黒人であるがゆえの差別やいわれの無い非難にもさらされた。

白人農場主とベラフォンテ演じる島の労働組合長の対立を軸に、3組の白人と黒人のカップルを描いた「日のあたる島」(57)では、ベラフォンテと白人のジョン・フォンテインのキスシーンが大物議をかもしたりもした。

今回の「拳銃の報酬」は、白人と黒人の対立が悲劇的な結末をもたらすベラフォンテの映画における代表作である。フィルムノワール、サスペンスとしても大変よくできていて、手口は何ともアナログながら、今観ても緊迫感があっっておもしろく、ベラフォンテもわずかに唄う。



「拳銃の報酬」のベラフォンテとライアン。



「拳銃の報酬」の別バージョンのパンフ。

いにしえの映画つれづれ⑤ 「拳銃の報酬」ハリー・ベラフォンテ追悼

ベラフォンテが設立したハーベル・プロの作品で、「復讐は俺に任せろ」(53)や「悪徳警官」(54)等の原作者ウィリアム・P・マッギバーンの「明日に賭ける」を「刑事マディガン」(68)等のエイブラハム・ポランスキーがジョン・オリバー・キレンズの変名で脚色。「ウエスト・サイド物語」(61)や「サウンド・オブ・ミュージック」(65)等で巨匠となる前のロバート・ワイズが監督した。ワイズは初期から注目され、上映時間と劇中の時間が一致する先駆的作品「罨」(49)やSFの佳作「地球の静止する日」(51)、女性死刑囚を描いた「私は死にたくない」(58)等の意欲的な作品を発表し続けてきた。

ニューヨークの古いアパートに暮らす老人バーク（エド・ベグリー）は、法廷侮辱罪で服役経験のある元警官。上司への復讐と老後の生活のために銀行強盗を計画し、復員軍人で前科のあるスレーター（ロバート・ライアン）を仲間へ引き入れる。仕事も

なく気のいい女ローリー（シェリー・ウィンタース）に養われているスレーターはつねに不満をいだき、奪った金で一旗あげるつもりだった。狙いをつけたのは市街地から離れた地方都市の銀行で、毎週木曜に翌日の給料支払いのため15万ドルの現金が運び込まれ、数人の行員と老夜警が残っているだけだった。定時に黒人のボーイがサンドイッチとコーヒーの夜食を運んでくることをつきとめ、替え玉を使って受け渡しの際に押し入る計画を立てた。そのために、競馬の借金でギャングから脅されているクラブの黒人歌手ジョニー（ベラフォンテ）を新たに引き入れた。異常な黒人嫌いのスレーターとジョニーは初対面から反目し、バークは気をもんだがやるしかなかった。決行の時刻、バークがボーイにつき当たって夜食をぶちまけて台無しにし、ボーイが店に戻ったすきにジョニーが銀行へ向かった。チェーンを外さないと受け取れないようにいつもより大きな箱を

かかえ、老夜警がチェーンを外した途端、バークとスレーターがなだれ込んだ。まamoto大金を奪うことに成功したが、スレーターは何も知らずに作り直した夜食を運んできた無抵抗のボーイを、ためらいもなく拳銃で強打した。スレーターの黒人への根深い憎悪は、成功しかけた計画を狂わせていった。バークはスレーターがジョニーに渡すはずだった車のキーを自分に渡したため、やむなく金を持って外へ出た。そこで、たまたま通りかかった警官に怪しまれ、応援も駆けつけて激しい銃撃戦となった。重傷を負いながらもキーを渡そうとしたバークは射殺され、その間に逃げたスレーターをジョニーが追う。ガソリンタンクに上ったスレーターをジョニーが追いつめ、互いに憎しみを込めて拳銃を向けた。銃声一発！タンクは爆発し、激しく燃え上がった。

翌朝、現場検証で二人の死体を発見した警官がつばやいた。「黒人がいたそうだ



白人と黒人のキスシーンが物議をかもした「日のあたる島」。表紙はジョン・コリンズ。



“庭の千草”に似たテーマ曲が有名な「誇り高き男」は、ライアン（中央手前）の代表作。

いにしえの映画つれづれ⑤ 「拳銃の報酬」ハリ・ベラフォンテ追悼

が、これじゃどっちがどっちだか判らないな」。

ラストは、ガスタンクの大爆発で幕を閉じるジェームス・キャグニーの「白熱」(49)のパクリだが、最後の一言が作品のテーマをすべて語っていた。ロケを多用し明暗を強調した撮影が素晴らしく、モノ口の利点を最大限に活かして効果を盛り上げた。

人物描写も見事で、人生に行き詰まり犬を相手に孤独を癒し、それでもなおあきらめ切れずに銀行強盗をたくらむ元警官の老人パーク。ヒモのような暮らしに鬱屈した日々を送るスレーターが、クリーニング店から受け取ったのは情婦のドレス。憂さを晴らそうと一杯ひっかけに入ったバー

で兵隊にからまれ、カッとなってつい本気で殴ってしまう場面に、この男の心情と短絡的な性格が集約されていた。クラブ歌手のジョニーも大変な家族思いでありながら、博打好きがこうじて妻子に去られ、競馬の借金が返せなければ家族に危害を加えると脅されて仕方なく悪事に加わる。それぞれの事情から“明日に賭ける”ことを余儀なくされた、底辺にうごめく三人三様の人間模様が哀れを誘う。

特筆すべきはモダンジャズのBGMだ。フランスのロジェ・バディムが「大運河」(57)で、それまで映画では使われていなかったモダンジャズを用いて大きな話題となった。ワイズも前記の「私は死にたくない」で早速モダンジャズを使い、本作で

は「大運河」のジョン・ルイスを起用して成功を収めた。以降、この手の映画にはモダンジャズがよく使われるようになり、バディムと共にワイズも映画にモダンジャズを定着させた功労者といえるだろう。

この映画の翌年、ベラフォンテの出世作でオール黒人キャストによる異色のミュージカル「カルメン」(54)がようやく日本公開され、公演のために来日もした。プロデューサーとしても活躍し、黒人としては初めてエミー賞を受賞。60年代は公民権運動に邁進し、キング牧師とも大変親しく腹心の一人でもあった。ブラックパワーの先兵として、ベトナム反戦や反核運動等の社会運動家としての活動が目立ち、過激な言動が問題になることもたびた



ライオンがパチンコの元締めギャングを演じた「東京暗黒街 竹の家」(55)。大々的な日本ロケが話題になるも、珍妙な日本描写から国辱映画と酷評された。たしかに、アメリカ人のパチンコ元締めなんて聞いたことがない…。しかし、今では失われた風景が収められている点で稀少価値がある。表紙は後に国会議員も務めた山口淑子。他には国際スターの早川雪舟や、テレビの「アンタタッチャブル」でブレイクする前のロバート・スタックが捜査官役で出演している。



アメリカの恥部を描いた「十字砲火」は占領下の日本での公開を見送られ、39年後の1981（昭和61）年にようやく劇場公開された（この間にテレビ放映は何度もあり）。主演はヤング、ミッチャム、ライオンの“ロバート三人組”。ライオンの助演賞をはじめアカデミー賞5部門にもノミネートされた（すべて落選）。

いにしへの映画つれづれ⑤ 「拳銃の報酬」ハリー・ベラフォンテ追悼

びあった。久しぶりの日本公開作は同じ黒人のシドニー・ポワチエ主演、初監督の西部劇「ブラック・ライダー」(72)。その後はロバート・アルトマンの「カンザス・シティ」(96)、親交のあったロバート・ケネディが撃たれたホテルに居合わせた人々のその日の群像劇「ボビー」(06)に出演し、初めて採用された南部の黒人警官と白人至上主義団体KKK 団との暗闘を描いた「ブラック・クラウンズマン」(18)が遺作となり、最後まで初心を貫いた。ブッシュ元大統領(息子)を嫌悪し、閣僚のパウエル国務長官やライス補佐官にも白人に媚びていると非難の矛先を向けていた。公民権法をはじめ、数々の苦難を乗り越えて先人たちが勝ち取った制度が、保守派が多数を占める連邦最高裁によって次々後戻りさせられている昨今。ベラフォンテは断然に苦悩するアメリカ社会を、さぞ憂いていたに違いない。

実娘のシャリも歌手、モデル、女優として活躍し「愛が聞こえる」(81)等に出演している。

黒人を忌み嫌うスレーターを演じたロバート・ライアンは、実はハリウッドきっての進歩派として有名だった。出世作となった「十字砲火」(47)ではユダヤ人を憎悪して殺す復員兵、「日本人の勲章」(55)でも真珠湾攻撃の恨みから日本人を殺害(日本人は出てこない)する田舎の顔役と、自身とは正反対の役柄をたびたび好演した。学生時代はボクシングに熱中したヘビー級のチャンピオンで、本格的なデビュー作もボクサー役。ワイズと組んだ前記「畏」でも八百長に巻き込まれるボクサーを演じた。フィルムノワールをはじめ社会派映画、西部劇等様々なジャンルの作品で活躍し、主役から準主役、脇役、善悪を問わず強い印象を残した。訳ありの保安官を好演した「誇り高き男」(56)は、アクションにサスペンスの要素も加味した良質の娯楽映画の典型のような作品で、ライアンにふさわしい代表作だった。60年代に入ると「史上最大の作戦」(62)等の大作映画の脇に回るが多くなり、上級軍人役など良く似合って作品に重みをつけ

た高級アパートのダコタ・ハウスも所有し(レノン夫妻はライアンから賃借し、彼の死後に購入した)、後進の指導にも熱心に取り組んでいた。

頭目を演じたエド・ベグリーは、舞台から40年代後半に映画入り。ライアンとは、40年近くも経って日本公開されたフィルムノワール「危険な場所で」(51)で、部下と署長役ですでに共演している。アクの強い容貌を生かして、主に顔役や偏狭な老人役等で活躍した。初回の「十二人の怒れる男」(57)の偏見に凝り固まった陪審員のような役が得意で、地方のボスを好演した「濁った太陽」(62)でアカデミー助演賞を受賞。しかし、人生に敗れ、元は仲間だった警官に撃たれて、冷たい路上で死を迎える本作が深く記憶に残る。「刑事コロンボ」の犯人役等を演じたエド・ベグリー・ジュニアは実子(金髪であり似ていない)。映画、テレビに早くから多数出演しエミー賞にも何度もノミネートされているが受賞には至らず、シニアに比べると印象が薄い。



あの日、未来は明るかった——。
懐かしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

ケーシー先生や力山に憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぴいの少年時代。一方で、周りを預り受け捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。午の給餌の馬肉100%コンビーフや怪しい塩けい素も売られ、食の安全はそっちのけ状態。
“古き良き昭和”はかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた歴史なエッセー。

大田区六本木を中心に、
高度成長期の東京が
いそぎと舞ります。

| | | |
|---|--|---|
| 付録ムビー テレビ・芸能 1. テレビの青春時代 2. 教科書だったアメリカのドラマ 3. アロレスと力山 4. 実写版「録音アトム」と「鉄人28号」 5. コマソンの女王 橋トシエ 家電 6. 電気釜の裏うち 7. カラーテレビ狂熱曲 8. リモコンテレビが欲しい!! 9. クーラーをつはたまま理者と死ぬ!! 10. ボラロイカメラ 11. 可愛いワジベトカメラ 12. 8ミリフィルム | 食 13. モナカカレーと「少年ゼット」 14. アメリカンドッグ監製のカレー 15. ハンバーガー監製 16. スパゲティは夢める物? 17. 味のトクメシ 18. 駄菓子屋とお菓子屋のあったころ 19. 初来ジャース原簿記 20. 傑作! 噴水型ジュース自販機 21. 10円アイスクリューが花盛り 22. 消えたガムつづり ホビー 23. 鉄の手廻り 24. 2日車とクラッカー 25. 銀玉鉄砲の王道 | 26. 輝くマテル 27. 黒かった金銀製のモデルガン 28. アラモントル精神時代 社会・文化 29. ケネディの時代 30. 外国産品 31. 国産車は酷使車? 32. サンドイッチのような三角 33. ファーントはワンダーランド! 34. 町の映画館 35. 前代に決死コップ 36. 月刊マガジンの付録 37. ベラベラのメソッド |
|---|--|---|

当書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて
本文：108 ページ / 映像：2分23秒 2012年9月 ミリアムワード(株) 発行
価格：3,980円 送料 1,980円(税込)
株式会社ユニワールド 東京都世田谷区松原 2-34-9
TEL.03-5376-7233 FAX.03-5376-7246 info@uni-w.com

た。遺作となったのは、ケネディ大統領暗殺に関わる黒幕の一人を演じた「ダラスの熱い日」(73)。前年に糟糠の妻をガンで亡くし、自身もガンを患って痛みに耐えながら撮影に臨んだという。こちらも進歩派らしい姿勢を最後までまっとうした、見事な俳優人生であった。あまり知られていないが、サマーキャンプにも夫婦そろって毎年参加する熱心なクエーカー教徒で、ジョン・レノンの終の棲家となっ

「拳銃の報酬」1959年 モノクロ

Odds Against Tomorrow
 原作 ウィリアム・P・マッギバーン
 「明日に賭ける」邦訳あり
 監督 制作 ロバート・ワイズ
 出演 ハリー・ベラフォンテ
 ロバート・ライアン
 エド・ベグリー
 シェリー・ウィンタース

著者紹介

千葉豹一郎
 作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。